

## 剔苔餘録：雑録

著者	山田，濟齋
雑誌名	龍南會雑誌
巻	8 5
ページ	8 7 - 9 5
発行年	1901-06-03
その他の言語のタイトル	剔苔余録：雑録
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5167">http://hdl.handle.net/2298/5167</a>

剔苔餘録

山田 濟齋

古人句あり曰く、爲剔苔紋讀古碑と、夫れ斷碑を尋ね古墳を探る、讀書尙古の士に在りては一段快心の事に屬す、況や平素其書を読み其人を慕ふに於ておや、余の肥に來る、大塚退野、秋山玉山、藪孤山三先生の高風を仰くこと久し、頃日閑を得て其瑩域を探り墓下に拜す、餘録を綴りて景慕の意を寓すと云ふ、

○大塚退野

附平野深淵森省齋

先生名は久成、丹左衛門と稱し、孚齋と號す、致仕して更に退野と號す、寛延三年歿す、年七十四、其墓花岡山の南萬日山麓に在り、茂林の中闊て一區となし、先生長へに其下に眠る、墓面九大字を刻す、曰く「退野先生大塚君之墓」と、墓背畧誌を刻す、荆棘竹樹瑩域を侵し、墓石八九、傾くものあり倒る、ものあり四顧悽然、先生の在時大に志を得ず、門人某に復書して、「玉山時を被得候と存候、爲己の學は天下寥々たる由左可有之候、其上に徂徠學流行と承候へば、我輩は抱經伏窮山一候事當然の勢にて御座候」と嘆せし其昔をも思ひ出で、俯仰感愴躊躇去るに忍びざるものありき、先生初め陽明學を信す、後疑ふ所あり、二十八歳始めて程朱學に志し、因て洙泗の源流に溯り孔孟の闡奥を窺はんと欲せり、曰く、仁は人の本領、學は聖人の本領と、乃ち朱子の語より仁に關するもの數十條を抄出して紫陽言仁要録の著あり、又其の仁説に曰く、仁者心之德而萬理具。毫釐有

不<sub>レ</sub>合<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>理則心不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>安。是以仁與<sub>二</sub>不仁<sub>一</sub>者。在<sub>二</sub>安與<sub>二</sub>不安<sub>一</sub>と、又曰く、聖人教<sub>レ</sub>人以<sub>レ</sub>仁爲<sub>レ</sub>名矣。仁之爲<sub>レ</sub>道也。洋洋乎發<sub>二</sub>育萬物<sub>一</sub>。峻極<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>天。故假<sub>二</sub>之爲<sub>レ</sub>霸。寂<sub>レ</sub>之爲<sub>レ</sub>佛。無<sub>レ</sub>之爲<sub>レ</sub>老。外<sub>レ</sub>之爲<sub>二</sub>俗儒<sub>一</sub>。故曰尊<sub>二</sub>德性<sub>一</sub>而道<sub>二</sub>間學<sub>一</sub>。致<sub>二</sub>廣大<sub>一</sub>而盡<sub>二</sub>精微<sub>一</sub>。極<sub>二</sub>高明<sub>一</sub>而道<sub>二</sub>中庸<sub>一</sub>。溫<sub>レ</sub>故而知<sub>レ</sub>新。下學而上達。毫釐有<sub>レ</sub>差則天人間隔云々。

孔子曰く、古之學者爲<sub>レ</sub>己<sub>メニ</sub>。今之學者爲<sub>レ</sub>人<sub>メニ</sub>と、程子曰く、爲<sub>レ</sub>己、欲<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>之於<sub>レ</sub>己也。爲<sub>レ</sub>人、欲<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>人也と又曰く、爲<sub>レ</sub>己、其終至<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>物。爲<sub>レ</sub>人、其終至<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>喪<sub>レ</sub>己と、嗚呼蕩々たる天下、亦<sub>タ</sub>爲<sub>レ</sub>己の義に昏く、利に驚せ名を衒ひ、榮を逐ひ臭に就き、營々逐々紛々擾々、偽善となり粉飾となり、走尸となり行肉となり、沐猴の冠となる、今古同嘆、先生嘗て曰く、今也道學四分五裂、曾孟程朱之正統幾墜<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>地と、其の常時に感慨するもの何如ぞや、又曰く、予也狷介之性與<sub>レ</sub>世不<sub>レ</sub>合。中年初聞<sub>二</sub>有<sub>二</sub>古人爲<sub>レ</sub>己之學<sub>一</sub>と、又た大學體驗說に左の如く云へり、以て先生學術の大要を見るへし、

夫學は明德を明にする工夫にて候、其工夫の始は致知格物にて候得共、今の學者爲<sub>レ</sub>己の志なく、其上に格物の方を誤り候得は、明<sub>二</sub>明德<sub>一</sub>の工夫と成不<sub>レ</sub>申候て、何程博學にて六經史子を讀盡し候とも心の昏みは寸分も明るく成不<sub>レ</sub>申候、書に向て道理を説候は聞ゆる事に候へとも、自家日用の心事は不<sub>レ</sub>學以前流俗の心に替る事は無<sub>レ</sub>之候、斯の如く己に益なき學を爲<sub>レ</sub>さんよりは、聖經の一語二語を會得して、一生夫を守り候が却て道に近かるべく候、

先生の在時、東都に荻生徂徠あり、京師に伊藤東涯あり、其學一世を風靡す、又幕府昌平校は林氏之を主り、各藩之に倣ふ、故に熊本藩も數々林門の高弟を聘して學政を託す、才俊の士之に滿たざる

もの往々藹園に趨く、故に先生の學全く時を負き世と孤なり、是を以て先生生前才を事功施爲の上に見る能はざりしも、其遺書と其門弟子とは、以て其學を傳ふるに足れり、

先生固と體驗躬行の人なり、著書は其志に非ず、刊本は僅に紫陽言仁要錄一卷あるのみ、退野遺稿三卷、蓋し門人輯集する所、後散逸全本なし、横井小楠元田東野諸翁先生に尸祝ある所あり、其簡牘語錄等を收拾して三卷となし、孚齋存稿と稱す、近ごろ岡田廉治氏又其遺を拾うて拾遺一卷を附す、其他君子重習錄、批大學會解あり、

平野深淵附

深淵名は時成、字は仲龍、權九郎と稱し、深淵又は孤雲と號す、寶曆七年歿す、年五十三、退野より少きこと二十八歳、少にして退野に學び、尤も易を好み、易に於て又尤も程傳を崇信せり、退野亦易を尊信せざるに非ず、嘗て曰く、政事は大抵易道に備れりと、深淵に至りては更に師より進めり、嘗て帝範臣軌二書を藩主に進め、且つ意見を附して曰く、「程子の學は實孔孟の學、大中至正の道にて御座候、後世程朱の學脉を誤り候て、致知格物は博聞強記文筆及天下の古事技藝を多く窮る事と仕り、儒者の業は書を述作して名を發するに止り、天下國家治亂の機實に知る人なく、徒に口説に終り申候」と云へり、能く退野の學脉を傳ふるものと謂ふべし、平素程子易傳を崇敬すると神の如く、錦にて表紙を製し、繙閱の際一葉を了る毎に、象牙琴を以て之を啓て曰く、手指を以て之をするを欲せずと、又た易傳に跋して曰く、予の子孫に傳ふる所は唯易傳のみ、予身を終る後必祭る勿れ、深く易傳を讀め、是れ即ち祭なりと、其篤好知るべし、遺著深淵存稿二卷、程易夜話一卷、程

元田東野翁嘗て古今の英烈忠賢十六人を咏懷して希賢の意を寓せり、其待講筵餘吟に見ゆ、其一武内公、其二鎌足公、其三和氣公、其四百川公、其五菅公、其六小松内府、其七畠山子、其八藤房公、其九楠公、其十小楠公、其十一北畠公、其十二加藤公、其十三蕃山先生、其十四鷹山公たり、其十五は即ち退野深淵二先生とす、推服此に至る、二先生の徳孤ならずと謂ふべし、其詩左に録す、

其十五

退野深淵二先生

淡淡之水深千尺。博溥淵泉不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>測。涪<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>濁剪無<sub>レ</sub>痕。宛與<sub>三</sub>延平<sub>一</sub>合<sub>三</sub>其徳<sub>一</sub>。誰傳<sub>三</sub>其道<sub>一</sub>。孤雲翁。程易真理妙心通。平易之中神機發。渾厚之底包<sub>三</sub>豪雄<sub>一</sub>。致<sub>三</sub>君堯舜<sub>一</sub>平生志。浩歌打<sub>三</sub>缶待<sub>三</sub>命終<sub>一</sub>。海内名儒可<sub>三</sub>屈指<sub>一</sub>。道德眞傳誰耶是。嗚呼非<sub>レ</sub>林非<sub>レ</sub>伊又非<sub>レ</sub>崎吾服東肥兩夫子。

森 省 齋 附

錄

省齋名は久大、熊野宮社司たり、石見と稱す、安永三年歿す、年六十一、深淵より少きこと九歳、弱冠贊を退野に納れ、沈潜刻苦其學大に進む、窮理得力の處に至ては蓋し深淵の上に在り、

西依成齋肥後玉名郡の人、初め退野に従ひ、後京師望楠書院に遊ひ若林強齋に師事す、強齋没後其業を承け書院を主り、名京攝を動かす、寶曆五年歸省す、時に退野の死を去ること五年、成齋年五十四、省齋年四十二、相共に答問す、其語載せて西依答問に在り、數節を左に抄録す、

省齋曰、老翁<sub>退野</sub>の學はいかが見及ばれ候哉。西依<sub>云ふ</sub>曰、世の學者は只記誦詞章に止りて其上の事はなく、痒もき所に手の届かぬにて候、老翁の學は痒ゆければ手を遣り搔き候と申程の事にて候。省

齋曰よくこそ見及び給ふもの哉」西依曰、程子の學は居敬窮理の四字にて候」省齋曰、居敬も窮理も違はずして、志の向ふ所に因りて千里の差ひと成候」西依曰、夫は如何なる所にて候や」省齋曰天下の儒宗とならんと志し學に向ひ候へば、居敬窮理皆儒宗となるの基となり候、功業を立んと志し學に向ひ候へば、居敬窮理皆功業を立る基となり候 是皆不<sub>レ</sub>知不<sub>レ</sub>覺外と成る所に候 如此して聖經を讀み程朱の學と申て程子朱子の語を常に誦し候とても、程朱の學にてはあるまじく候、抑仁を求め性に復らんと志し學に向ひ候へば、居敬窮理皆仁を求め性に復る用と成り候、故に入處を得るを一大事と申事にて候」西依曰、段々被仰聞大意入處を得候、

省齋又曰く、學を爲すも己が爲め學ばずば、唯空しく講習議論に日を暮し、言語文字を玩ふのみ、如此は終身力を盡し學を勤むるも、終に古の道に入る能はざるべし、是則ち敬の一字聖學始終の要、修道の教たる所以なりと、其の退野の神髓に於て看得親切と謂ふべし、西依答問は省齋自記して、西村某に示す所に係る、其他聖學或問一卷、退野語錄一卷あり、

### ○秋山玉山

先生名は定政、一の名は儀、字は子羽、儀右衛門と稱し、玉山又た青柯と號す、寶曆十三年歿す、年六十二、龍田山の南麓、一邱偃蹇す、小峰<sub>陸軍墓地の南隣</sub>と云ふ、我高等學校を眼下に控へ、其地爽塏、其望空濶、遠山近水來て伎を墓前に奏するの處、是れ一世の偉人玉山先生を埋むる地なり、墓石題して「肥藩教授玉山秋先生之墓」と云ふ、

先生醫より儒に擢てられ、昌平學校に學ふと前後十年、偶々中興の明主靈感公嗣立に會し、明良水

魚、恩遇殊に深く、請ふて藩學時習館を興し、入りては君前に侍讀し、出ては後進を陶冶す、其東都に在るや、諸侯爭ひ延て上客となし、聲譽遠邇に噪ぐ、先生の一生真に是れ得意の歴史たり、性寛裕にして濶達、詩文書画達せざる所なし、五絶最得意たり、一日公燕に侍し酒酣なり、先生前みて曰く、臣の五絶開闢以來有らざる所、當世の作者は譬、蛇を畏れずと謂ふべしと、時に高野蘭亭側に在り曰く、子羽我を侵すと、蘭亭官にして詩名あり、公大に笑ふ、五十四歳の秋富嶽に登り、二句を賦す、曰く「青天不礙南溟鳥。紫氣高懸北極峰」と、先生酒間毎に言ふ、後世作者恐らくば後對を補續する者なけん、其抱負此の如し、

先生の學、材を林門に成す故に該博なり、先生の文、腴を藹園に取る、故に雄麗なり、服部南郭と莫逆の交あり、南郭先生富嶽之記を評して曰く、有「天地」來、始有「此山」。有「此山」、始有「此文」と、先生嘗て兒孫に書を與へて曰く、凡讀書法。自當「別具」一隻眼、即捨「短取」長。沙中往々見「金」。百家五車小説稗官。皆我胸腹百眼厨中物。莫「不」給「我用」。左右逢「源」即爲「得」也。古人云讀書當「眼到口到心到」是爲「三到」余則云宜「加」一手到「更名爲」四到「矣」。蓋心口眼三者皆屬「虛」。唯手寫抄書爲「實事」。終身「不」忘故曰。讀「書」不「如」寫「書」と、退野嘗て曰く、博識も四書五經と歷代の書を少し見れば善しと、又曰く論語も學而の一篇を讀まば餘は通すべし、夫もならぬ人ならば學而の一章にて善からんと、二偉人が志向崇尚の背馳せる此の如し、然れども先生の坦懷洒然たる、未だ嘗て退野に眷々せずんばあらず、其の山時文に復する文に曰く、冢藪二公儼然斗山。足下奚取「秋生」爲と、冢藪は太塚退野藪慎庵を云ふ、又慎庵に與ふる文に曰く、吾黨多士也。於「熊家」先生則吾「群」三舍「矣」。其餘則旗鼓相當

或偏師取之。惟於足下則免胃趨風と、鶴は熊谷竹堂を云ふ、先生の退野に推服せる是に於てか見るへし、

藪孤山先生の墓誌を作り、其末云ふあり、先生嘗語人曰。吾少有三願。登富嶽。建學宮。二願遂矣。人間其終笑而不答と後人其の何たるを知るものなし、余を以て之を付るに、先生の二願豈酒なるなからんか、先生酒を嗜む命の如し、晩年益盛なり、其の服部南郭に與ふる書中左の語あり、先生亦酒中の仙なるかな、

僕貪飲外無復他伎倆亦唯偃鼠之量。一敗如泥。醉態婆娑。歸途搖々。步不在趾。屢唐突路人。糟風揚於百步。路人皆以目。屢爲士驥扶起。幸得下投之溝中。以反邸舍矣。鼾睡無夢。直到翌午。尙在被中轉臥曰。快哉醉我也。日高幾丈。宿醒三日。恍然如癡。

孤山云ふ、先生著述甚多しと、然れども世に行はる、もの玉山詩集六卷、玉山遺稿十二卷あるのみ、先生經子諸書に於て欄外記述する所少からず、尤も春秋左氏傳を精研し、行間雕題朱墨紛如、家人に命して曰く、是れ余か心血の注く所、慎て家に藏せよと、傳へて明治丁丑に至り、兵燹一空餘す所なしと云ふ、

### ○藪孤山

先生名は懋、字は子厚、茂次郎と稱し、朝陽又は孤山と號す、享和二年没す、年六十八、本妙寺山中に葬る、墓石に府學教授孤山先生藪君之墓と誌せり、父愼庵名は弘篤、退野より少きこと十二歳、程朱學を崇尚し、退野と相歡すること兄弟の如く、其の没するや退野殆と哭して慟せり、其祭文に



曰く、慎庵奚至於不壽耶。道學將誰使之正、君德將誰使之盛。後生將誰使之有立と、玉山亦云ふ、家數二公儼然斗山と、其の一時に重んぜらるゝ斯の如し、既に斯父あり、即ち斯子ある亦偶然に非ざるなり、

先生十歳父を喪ひ、二十三江都に遊び、二十四轉して京都に遊び、二十六歸藩時習館訓導を命せられ、二十九助教に上り、三十二教授となり、六十六始て職を辭せり、玉山の時習館に教授する九年にして死し、先生其後を承け、前後教職に在ること四十年、熊本藩學の規模體段蓋し先生を俟て緒に就きしもの多きに居らん、爾後二百年の學風亦實に先生に賴て其根底を固められたり、

先生學定師なし、少にして氣剛才俊、博覽多涉を務む、其の京師に在るや始て悟る所あるものゝ如し、帆足某に答へて曰く、僕好博覽、自幼涉獵諸子百家、未嘗潛心聖賢之書、是以博雜無用。望洋自惑。讀書愈多。距道愈遠。近來頗察其弊、痛加鞭策、頗專心聖賢之書、豫度歸鄉之後、閉門謝客。專一用力聖賢之書數十年。可少救汎濫外馳之弊矣と、以て其志を見るへし、當時西依成齋京師に在り、先生より長する卅餘歳、先生其門に出入す、思ふに亦感興する所なしと謂ふ可らず、然れども先生終生の學問志望は、全く先志を祖述するに外ならざりしなり、白木生に答て曰く、慙先君子夙志孔孟之道、深信程朱之學。而憂異學之害眞。邪說之亂眞也。將以論著以辨異學之非也。不幸先君子不及下壽而沒。書竟不成。是時慙幼齡不辨菽麥。幸得嚴兄質執之訓。稍知所向。於是竊憂時學之有弊。傷先志之未遂。不敢自測心存祖述と、而て其先志を祖述するや又退野を祖述する所以なり、赤崎彥禮を送る序に曰く、大塚先生奮然興起。乃始專力朱子之學

先生繼興。兄事大塚先生。同心同德。遂大啓斯學。是に因て之を觀れば、先生の時習館に於ける四十年の事業は、遂に愼庵二子の遺志を成せるものと謂ふへし、

然れども人は各其性の近き所に向ふて趨る、深淵省齋の退野を傳ふる、未だ悉く退野の眞面目を傳ふる者に非ず、先生の退野を傳ふる、亦豈悉く其軌を一にせんや、要するに先生の學之を愼庵に本くるもの多きに居れるなり、蓋愼庵の退野に於ける、本と同心同德と稱すと雖ども、其間些く異同なくはあらず、愼庵に詩文集十卷あり、退野之れなし、退野に紫陽言仁要錄あり、愼庵に之れなし、愼庵曰く、程朱の學は世に行はれぬ學なりと、退野曰く、愼庵も文字に泥まるゝ所ありと、夫れ然り、若し能く二子の異同此の如き所以を推究するものあらんか、乃ち又先生の學、深淵とならず、省齋とならず、別に卓然樹立する所あり、能く四十年の長き時習館の敎鐸を秉りて成功せし所以を知るに足らん、高本紫溟其墓に誌して曰く、君實主其家學。由程朱之敎。但不如世之所謂宋學者、孤陋而已と、眞に能く先生を知れるものなり、

先生の詩文俱に長す、其詩溫秀、其文雅飾、亦一代の儒宗たるに耻ぢざるなり著作、樂洋集二十四卷崇孟一卷、孤山遺稿十二卷等なり

